

アジア民衆史研究 第12集

2006年度報告

死をめぐる ポリティクス

東アジアにおける民衆の世界観(6)

序文

本論集は、アジア民衆史研究会が2006年度に行った2回の研究大会における報告、参加記、討論要旨を合わせて収録したものである。

本会は、ワーキンググループの定期的な勉強会で年間の研究方向を探って趣旨文を作成し、研究大会では冒頭にそれを参加者に提起して討議をかさねることで全体としての問題意識の共有をはかってきた。これは、趣旨の浸透、議論の蓄積にとって有効であり、ワーキンググループに若手の研究者を集めるうえでも求心力を発揮し、会活動を活性化させてきた。そうした蓄積が進むなかで、研究の国際交流も、その時その時の単発的なものではなく、持続的な国際的ネットワークづくりの観点から、韓国の若手研究者とのパイプが太くなり、最新の段階では同一史料を用いた共同研究の兆しも見えてきている。

本年度も、アジア民衆史研究会は、2001年度以来の中期テーマ「東アジアにおける民衆の世界観」の解明の線上に年度テーマを設定している。本会では、「民衆の世界観」をひとまず「人々の空間・時間・人間に関わる意識の総体」と理解しておいて、年度ごとにより具体的な次元のテーマを立てて研究大会を企画してきた。2001年度は民衆の世界観の一側面として「君主観」、2002年度は「他者をめぐる空間認識」、2003年度は、特に権力関係の中での空間認識を検討して、支配層と民衆との認識のズレを検討した。2004年度は、移動の結果としての接触という場面から、どのような世界観が形成され変容をとげたのかをテーマとし、国家を意識しない民衆の空間認識を検討した。2005年度は世界観を創出する行為としての〈語り〉に注目し、特に東アジア地域共通の経験としてウェスタンインパクトについてのさまざまな〈語り〉を検討した。

6年度目に当たる今年度は、「死をめぐるポリティクス：東アジアにおける民衆の世界観(6)」を年間テーマとした。死は万人が経験する。しかし、人間社会にあっては、死は生物的事象に終わらない。時に、死せる状態は政治的文化的行為でさえある。言うまでもなく、それは死する人が行為するのではなく、類縁者や関係者、社会集団・機構制度の側が死者に社会的な意味づけを付与し行為させるのである。死はたんなる生の終焉ではなく、死後も、いわば死者の生を生きる。あるものは、慰霊すべき、模範とすべき死者とされ、ある者は国家にまでいたる広狭の共同体

の守護者とされる。死者は、生者によって価値づけられ、記憶を再生産するための顕彰碑・モニュメントが創られ、儀礼や禁忌などの慣習的实践が生みだされる。対抗的な意味づけが、生者の世界と死者の世界を引き裂くことも起こりえる。そのような死者の価値すけが進むと、今度は生者が死の形式を選択することも行われ、こうして死と死者は生と生者を逆規定しはじめる。ここに、死が、民衆の世界観の問題として検討されるべき理由がある。

アジア民衆研究会では、死に対する社会的諸力の相克的介入を、「死をめぐるポリティクス」として考えてみた。19世紀から20世紀にかけて、東アジア地域の民衆は、死をめぐるイデオロギー、死を悼む形式をめぐる複雑なヘゲモニー闘争を展開し、現代のわれわれもその葛藤から解放されていない。本論集は、このような観点から行われた研究大会の記録である。会員・読者からの忌博のないご批判と、同時に、会活動へのご参加を期待したい。

2007年5月3日

アジア民衆史研究会代表 安在邦夫 深谷克己

目次

アジア民衆史研究 第12集

序文

安在邦夫 深谷克己

2006年度趣旨文 死をめぐるポリティクス

佐野智規 7

第一回大会

葬祭の維新 ―神葬祭から火葬禁止へ―

中嶋久人 9

植民地朝鮮における土葬・火葬・風水

高村竜平 34

参加記

大山裕史 50

討論要旨

53

第二回大会

近世都市江戸の墓制 ―東京の墓制の前提として―

西木浩一 56

日本統治期台湾社会の死体をめぐる状況

胎中千鶴 70

参加記

水村暁人 88

討論要旨

91

目次

亞細亞民衆史研究 第十二集

序言

安在邦夫 深谷克己

宗旨 二〇〇六年度：死亡政治學

佐野智規 7

第一回大會

殯葬與祭祀革新 ——從神葬祭到禁止火葬——

中嶋久人 9

殖民地朝鮮的土葬、火葬與風水

高村竜平 34

評論

大山裕史 50

討論要旨

53

第二回大會

近世都市江戸的墓制 ——以東京的墓制爲前提——

西木浩一 56

日本統治期台灣社会的屍體觀

胎中千鶴 70

評論

水村曉人 88

討論要旨

91

목차

아시아민중사연구 제 12 집

서문

안자이 쿠니오 후카야 카즈미
安在邦夫 深谷克己

2006 년도 주지문 죽음에 둘러싼 정치학

사노 토모노리 7
佐野智規

제 1 회 대회

상제의 유신 —신도방식에 의한 장송예의로부터 화장 금지에—
나카지마 히사토 9
中嶋久人

식민지 조선에 있어서의 매장 · 화장 · 풍수
타카무라 류헤이 34
高村竜平

참가기
오오야마 히로후미 50
大山裕史

토론요지 53

제 2 회 대회

근세 도시 에도의 묘제 —도쿄의 묘제의 전제로서—
니시키 코이치 56
西木浩一

일본 통치기 대만 사회의 시체를 둘러싼 상황
타이나카 치즈루 70
胎中千鶴

참가기
미즈무라 아키토 88
水村暁人

토론요지 91

2006年度趣旨文

死をめぐるポリティクス

——東アジアにおける民衆の世界観（6）

大多数の人びとがおそらく経験するであろうところの死。言うまでもなく、それは死するその人にとっての個々人の問題、個別的な限界状況であるが、同時にそれは、さまざまな人々・社会諸集団・あるいは諸制度などからの介入によって、社会的な「何か」を生産する場でもある。この場において個々人の限界状況は、さまざまな位相における限界状況へと接続を試みられ、あるいは社会的な意味——たとえば「慰霊すべき死者」「模範とすべき / すべきではない死」「共同体の守護者」など——が、あるいはそれを再生産するためのもの——顕彰のための施設・モニュメント、儀礼や禁忌などの慣習的实践など——が生産される。

さしあたってここでは、死という経験の場に対する介入と相克のダイナミズムを、「死をめぐるポリティクス」として考えてみたい。アジア民衆史研究会は2006年度、「死をめぐるポリティクス」という年間テーマのもと、死という経験を巡るさまざまな介入と相克、分裂と結合の複雑な様態を考察する。それを通じて、19世紀から20世紀にかけての東アジア地域における「民衆の世界観」の変容過程を考えるための糸口を探ってみたいと思う。

アジア民衆史研究会では2001年度以来、中長期的なテーマとして「東アジアにおける民衆の世界観」を掲げた。このテーマのもと2001年度は民衆の世界観の一側面として「君主観」を検討した。

続いて「他者をめぐる空間認識」という問題を設定した。「民衆は自らの所属している空間をどのように捉えているのか」という問題設定のもと、2002年度は「自己と他者との関係の中における空間認識」を検討した。2003年度には特に権力関係の中での空間認識の問題を検討し、支配層と民衆との認識のズレの問題について検討することができた。また、「境界」は本源的に存在しているのではなく、「他者」との出会い＝接触を通じて形成されていくものであること等についても、幅広い議論をすることが出来た。さらに2004年度は、移動の結果として起こる接触という場面から、どのような世界観が形成され変容をとげたのかという問題を取りあげ、直接的には国家を意識していない民衆独自の空間認識の検討を試みた。

2005年度は世界観を創出する行為としての〈語り〉に注目し、特に東アジア地域共通の経験としてウェスタンインパクトについてのさまざまな〈語り〉を検討した。「〈語り〉が事実符合するかどうか」という問いをいちど留保した上で、なぜそのような〈語り〉が生産されるのかを問うことによって、〈語り〉のエコノミーの相対的な自律性とその転移・再利用(佐々報告)あるいは再生産(山田報告)、〈語り〉を媒介とした社会認識の構築(青木報告)あるいは運動(杉山報告)を考察することができた。

しかしこのような成果を得ながらも、国民国家論の問題圏——多少の逸脱やせめぎあいがあったけれども、終極的には国民国家のイデオロギー編制に収斂するのだ——を踏み越えられたかどうか、やや心もとない印象も否めない。近世・近代移行期においては、「終極的には」国民国家の権力装置とそのイデオロギーがヘゲモニーを握る、それは概ね確かなことだと言えるだろう。2006年度のテーマ「死をめぐるポリティクス」も一応はそれを前提としている。しかしここで検討したのは、「終極」のやや手前の空間、死という出来事によって出現した、さまざまな力の接触と闘争の空間である。この空間への介入は複数の位相からやって来るため(死者の近親者という位相、所属していた地域・職業・信仰などの諸集団等)、「終極的には」支配的イデオロギーの主導の下に序列が形成されるとは言え、子細に観察すればその複雑かつ屈折したヘゲモニー闘争のダイナミズムを明らかにすることが出来るのではないか、そのような微細な闘争の集積はどこへ行くのか——これが本年度テーマの目論見である。

文責：佐野智規